

村の廢合や鐵道の開通、港灣の改造などからみて既に全く古いものにはなつたけれども、層式現圖法によるアトラスとしては、今日に至つて猶唯一のものである。述べてこの點に達すると民間學者の地圖に對する努力は未だ十分であ

るとはいへない。どうかしてかうした形勢を、せめてドイツあたりのアトラス出版界の程度に追隨せしめたいと思ふのは獨り筆者一人の感ではあるまい。(完)

世界戰後の地名考 (七)

瀧川 規 一

アフガニスタン(Afghanistan)(續々)。アフ

ガニスタンは人口概算六、八三〇、〇〇〇と稱せられ、種々なる民族によつて住まれてゐる。彼等を總稱してアフガン(Afghan)と云へども實際は二種の優勢を占める種族の一なるヅラニ(Durani)族のみがアフガンと稱すべきものである。言語は波斯亞語とプシュツ(Pushtu)語である。宗教はモハメット教である。主要都會は

東アフガニスタンの首府カブール(Kabul)、西アフガニスタンの首府ヘラト(Herat)、南アフガニスタンの首府カンダハル(Kandahar)である。

アフガニスタンの歴史は紀元前より始まる。

近代の歴史は一七四七年アーマド・カン(Ahmad Khan)がヅラニ王朝(Durani dynasty)を建設せし時より始まる。一八三八年アフガニスタンが

露國と協商をなし居るを發見するや英國軍隊は侵入を開始し統治者を捕虜として印度に送つた。アフガニスタンにては統治者の官稱をアミール (Ameer) と稱す。抑もアミール又はエミール (Emir) と云ふ稱號はアラビア語にては指揮と云ふ語義を有し東洋回教國にては指揮者の意に用ひられる。元來、軍隊の稱號であつたが一般に支配者又は高級官吏又はマホメットの子孫の尊嚴を示す爲めに用ひられるに至つた。土其古のサルタン (Sultan) はイスラム (Islam) の指揮者としてエミール・ウル・ムミニム (Emir-ul-Muminin) と云ひ即ち信者の支配者との意に用ひられてゐる。英軍がカブールを占據するや一八四一年に叛亂起り英人の虐殺となつた。英國は一八四二年に二個軍團を送りカブールを再び占據した。これ初回のアフガニスタン戦争である。追放されたるアミールの王子シェーレ・アリ (Shere Ali) は王位を嗣ぐだが、露國と密約をなすに及んで一八七八年第二回のアフガニス

タンの戦争となつた。

一八七九年シェーレ・アリの息子と協約を結び英國はアフガニスタンの外交の統制權を得、カブールに英國代表者を置くことを約定し、カイバ峠 (Khyber Pass) を占有することによつて英帝國の領土を擴大した。其後屢英軍によつて虐殺が行はれた。英人の代表者サ・ルイス・カヴァニアリ (Sir Louis Cavagnari) のなした虐殺、カブールまで軍隊を進めたローバツ (Roberts) によつても行はれた虐殺はその主なものである。ローバツはカブールに殆ど一ケ年間滞在し殆ど絶え間なき敵對行爲に日を送つた。一八八〇年七月ローバツはカンダハル (Kandahar) まで進撃しカンダハル市を包圍してアフガン人を破つた。一八八一年より一九〇一年まではアブド・ウル・ラーマル (Abd-ur-Rahmar) が單獨の統治者であつたが、其子ハビブラ・カン (Habibullah Khan) が統治者の位地を嗣ぐだ。アフガニスタンの北の國境に關して露國と英國との間に

困難なる問題が續出してゐたが、遂に外交によつて解決されるに至つた。

一九一九年にはアミールが暗殺され、その第三子アマヌラ・カン (Amanullah Khan) は後繼者となるや抗英運動をなしたが凡ての點に於て敗れ遂に和平をなすべく餘儀なくされた。一九二九年彼が歐洲の習慣を輸入したが爲めに重大なる暴動蜂起を見、暴動の續行され居る間は彼及び其の一家一族、英人居住者等は英國の飛行隊によつて救出された。續いて彼は退位し暴動指揮者ハビブ・ラ・ガーデ (Habibullah Ghazi) が統治者となつた。然るにガーデも亦間もなく敗れ、ナディール・カン (Nadir Khan) と稱するアフガン人の軍人が一九二九年十月撰ばれて國王となつた。

アフリヂ (Afridi) と呼ばれる民族は印度及びアフガンの國境に住するパサンス (Pathans) と云はるる種族に屬し、背高く瘠せ、輕度に黒き皮膚を有し、イラン (Iran) 系のアリアン人種で

ある。彼等は北方のプシュツ語を言語としてゐる。彼等に入族がありそのうちコハト・パス (Kohat Pass) を根據にせるアダム・ケール (Adam Khel)、カイバ・バスを根據にせるザカ・ケール (Zakka Khel) の二族に對し英軍は膺懲の遠征軍を起したのである。

アフリカ (Africa)。世界の大陸の一にして亞細亞の西南に延びこれにスエズ (Suez) の地峽が附加されて居る。長さは南北五〇〇〇哩許り、東西四〇〇〇哩ばかりである。全面積略一一、五〇〇、〇〇〇平方哩、人口概算略一八〇、〇〇〇、〇〇〇であり海岸線は殆ど斷絶し居らぬ。

山岳學 (Orography) の見地から云へば、アフリカ大陸は四地域に別たる。一、沿岸平野

二、北アフリカのアトラス (Atlas) 山脈の地域

三、サハラの砂漠を含む西部及び北部の平原地域

四、南方及び東方の廣大なる高原地域に別たる。南部の高地には多數の山嶺があり、赤道地帯には死火山の噴火口が澤山ある。例へばキリ

キ・ニアロ (Kilima-Njaro) (110、000呎)、ケ
ンヤ (Kenya) (118、500呎) の死火山がある。
主要なる河流はナイル (Nile) 河、コンゴ (Congo)
河、ナイジャ (Niger) 河、ザムベジ (Zambezi)
河であり大陸の河流の三分の二は大西洋に向つ
て注いでゐる。内地には一大湖系があり、その
うちには東部アフリカにヴキクトリア・ニアン
ザ (Victoria Nyanza) 湖、タンガンイーカ (Tan-
ganyika) 湖、ニアース (Nyasa) 湖があり、西部
アフリカにはチャード (Chad) 湖がある。主な
砂漠は北部アフリカにサハラ (Sahara)、リビ
アン (Libyan)、ヌビアン (Nubian) の砂漠があ
り、南部アフリカにはカラハリ (Kalahari) 砂漠
がある。

地方植物の主なるものはサハラ砂漠内のオエ
シスに産する棗椰子 (date-palm)、西部及び中部
アフリカに産し護謨を生ずる高昇植物 (liana)、
油を生ずる棕櫚、その他經濟的に有用なる植物、
沿海地帯及びコンゴ流域地方の廣大なる森林に

産するマホガニ樹・黒檀、英領東アフリカ等に
産する杉材、アイビヤ (Ibex) の樟樹である。ア
フリカの地方的動物としては麒麟・單峰駱駝・水
牛・縞馬・犀・獅子・豹・象・チムバンジー・ゴリ
ラ及びバブーンである。

金は廣大なる地域に亘つて産出し、殊に南部
アフリカに多く、鐵鑛はアルゼリア (Algeria) に
於て加工され、銅は白耳義領のコンゴに産し、
石炭は主として南アフリカに於て産出する。

言語は四つの主なる語系に分かれ、南部及び
中部アフリカに於てはバンツ (Bantu) 語系が行
はれ、西部アフリカに於てはスダニク (Suda-
nic) 語系が行はれ、北部アフリカに於ては主と
してハミチック (Hamitic) 語系が行はれ、東北部
に於てはセミチック (Semitic) 語系が行はれてゐ
る。バンツ語及びスダニク語系は黒人の用語
にてこれに屬する言語は合計千百七十種ばかり
の言語があり、ハミチック語系に屬する言語は
五十種ある、セミチック語系に屬する言語も可

成多いが何れも外來語であり亞細亞人の用語に屬するものである。

住民の大半は黑人種でありその他にブッシュマン (Bushman) 族、ホットントット (Hottentot) 族、東ハイト (Eastern Hamite) 族、リビアン (Libyan) 族があつてアルゼリア (Algeria) 及びモロッコ (Morocco) に住し、その他セマイト (Semite) 族又はアラビア人が居り、多數の混血種が居る。

アフリカの古代史は大陸の北部に限られて居つた。原始人種は倭人であり今日猶中央アフリカに存在し、アラビヤ及びアジアよりの移民も亦原始人種を構成してゐた。最初の植民は埃及人・フェニキア人及び希臘人であつた。紀元初年より北部アフリカは全部若くは一部分順次他國によつて併合された。羅馬・ヴァンダル (Vandal) 族・アラビア・土其古によつて順次に併合されたが、十八世紀には佛蘭西によつて併合された。中央及び南部アフリカには埃及人・フェ

ニキア人・希臘人・アラビア人の殖民地が夙く存在し、十五世紀及び十六世紀に於ては葡萄牙の探險家が西海岸に走りコンゴに達しケープ (Cape) を廻つた。

英國人は一五五二年に初めてゴールド・コースト (Gold Coast) に達し、十九世紀迄には他國の探險者を凌駕するやうになつた。英國探險者は埃及の低地地方を頻に地圖に書き立て、アビシニア (Abyssinia)・セネガムボア (Senegambia) を探險し、上部ナイジャ (Upper Niger) 及びオレンジ河 (Orange River) を發見し、ナイル河の水源を探り、タンガンイカに接する大湖群を探險した。當時の有名なる探險者はブルース (Bruce)、ベンチ・パーク (Mungo Park)、ブートン (Burton)、スピーク (Speke)、リビングストン (Livingstone) 及びスタンリー (Stanley) であつた。

今日アフリカに於ける英帝國領は委任統治國を合して四、六五二、〇〇〇平方哩であり、人口

約五千萬と算せられてゐる。佛蘭西領は英國領に比して稍少い。英領の主なるものは南アフリカ・ユニオン(Union of South Africa)、委任統治の西南アフリカ保護國(S. W. Africa Protectorate)、英埃人のスーダン(Anglo-Egyptian Sudan)、ロデシア(Rhodesia)、その他ケンヤ(Kenya)、ナイゼリア(Nigeria)、ウガンダ(Uganda)、ソマリランド(Somaland)、ニアサランド(Nyasaland)の諸保護國であり、小領地としてはシエラ・リオネ(Sierra Leone)、モウリチアス(Mouritius)、モーレ・コースト(Gold Coast)及びガムビア(Gambia)がある。タンガンイカ領(Tanganyika Territory)は委任統治である。コンゴ自由州は(Congo Free State)は一九〇八年白耳義國に併合された。

佛領はモロッコの一部、マダガスカル(Madagascar)、アルゼリア(Algeria)、チュニス(Tunis)、サハラ砂漠の大部分及びコンゴの一部を包含する北部及び西部アフリカに於ける廣大な

る地域である。葡萄牙は西部アフリカ及び東西アフリカに於ける諸領土を有し、伊太利はエリトリア(Eritrea)、伊太利領ソマリランド、ツリポリタニア(Tripolitania)とチレナイカ(Cyrenaica)とを含むリビア(Libya)を領有してゐる。西班牙はモロッコの一部、リオ・デ・オロ(Rio de Oro)、及びスペイン領のギニ(Spanish Guinea)を領有してゐる。

一九一九年獨乙はアフリカに於ける諸領を奪はれ獨乙の舊領土は國際聯盟の決議(?)により英國・佛蘭西及び白耳義に委任統治領(Mandatory)になつた。アブシニア(Abyssinia)は元來より獨立王國であり埃及は一九二二年に初めて獨立國と宣告された。アビシニア人が廣大なるアフリカ大陸に於て古來よりの唯一の獨立國として極東の一島國を憐れるのも尤であり、過剰人口の極東女性よろしくアビシニアに行くべし。誘ふ風のある今日何故に極東の女性は躊躇するや。

英國にはアフリカの軍役に従事して功勞ありし者に授與する勳章がある。これを英語でメダル (Medal) と云ふ。日本の運動會のメタルのやうに聞えて安價である。然し英人は被征服者たるアフリカ人の感情を害しないやうにアフリカ戰役のこの勳章をアフリカ一般功勞章 (Africa General Service Medal) と云ふ名稱を用ひてほかにしてゐる。今後極東に於て事繁くなるにつれて新聞の煽動的記事に實は同意してゐても當局者はぼかしの言辭と表現とを必要とすることを忘れて貰ひたくない。被征服者の氣分を察知し得ない國民は世界を征服し得る程の大國民とはなり得ない。英國のアフリカ一般功勞勳章は最初一九〇二年に東部中央部及び西部アフリカに於ける遠征軍の勳功を記念する爲めに設けられたものである。勳章の表面は英帝エドワード (Edward) 七世が大元帥服を召されてゐる頭部と胸部とを表し、裏面にはブリタニアの神姿が獅子を隨へ片手を差出し日の出をバックにして砂

漠を下瞰してゐる。英軍のアフリカに於ける戰役は實に絶え間なく行はれ従つて勳章も屢授與されてゐる。その主なるものを舉ぐれば南北ナイゼリアに於ける頻發の戰鬪、一九〇〇年のウガンダ (Uganda) の戰、一九〇一年及び一九〇二年のジトバラント (Jubaland) ・ガムビア (Gambia) ・ランゴ (Lango) の戰、一九〇五年のジドバリ (Jiddalli) 及びキシ (Kissi) の戰、一九〇一年及び一九〇二―四年のマリランドの戰、一八九九―一九〇〇年の英領中央アフリカ (British Central Africa) の戰、一九〇一―二年のアロ (Aro) の戰であつてこれ等の戰鬪に勳功あつたものは授賞され功勞章を貰つて居る。

一八八〇年に英領南アフリカ (British South Africa) に於てアフリカ人團結 (Afrikaner Band) と稱する團體が南アフリカに生れた。和蘭人によつて組織され南アフリカの獨立を確保するを目的とした。そのうちにこの團結の目的が英統治に對し敵對心を緩和したが、時には和

新著紹介

第一輯 長野縣

されるものは各府縣朝鮮臺灣に亘つて五十五冊の撰定である。大出版である。第一冊の内容を通覽すると菊倍判二十葉の圖譜で一葉の農家生活圖を除くと悉く美麗な玻璃版で別冊として附するに四六倍判四三頁の解説を以てして居る。二十圖葉中に收められた寫眞は四十種に達し、各種村落景觀から農業及副業の狀態・民家・農家の生活・民間信仰に及んで長野縣に於けるあらゆる農業生態を網羅してゐるに近いものがある。解説には初め小むずかしい序説數篇の後に各圖に就いて説明と圖葉にない或る部分の説明とが數十名の郷土研究家によつて興味深く與へられてゐる。圖は誠に見事であり説明は手に入つたものであるが往々にして説明の理解し難いものが目に

田中啓爾著
古今書院發行

つく。これは恐く解説者にはよく判つたことであらうが餘りに讀者を物識りだと考へられて書いた爲めだと思はれる。つまりもつと平易に解説して欲しかつたのである。地理學の言葉の使用を誤つてゐるのが時々ある。編輯者の嚴密な校訂が必要であらう。一體かうした出版物を完成させるのは容易のことでなく、もつと民衆的なものなれば頒布も廣がらうが、解説を見ては獨りよがりや藥屋落に似たものがないとは言へないからこの點に注意されてこの難事業の遂行されるのを人文地理學發達の上から希つて止まない。恐く充分の資金を有して郷土研究圖譜發刊の緒に就かれたことであらうから中斷して會員を失望させないことだらうと信ずる。(S)

今秋の讀書期に於て、我地理學界に寄與された最も著しいポリウミナズな大冊子は、實に畏友田中教授のこの論文集である。菊版九五六頁、圖版三八一、別圖三三版、かうした數字をみる丈でも、本書がいかにか樽然として堂々たるものであるかを知らしめる。しかもその挿圖が珍らしい寫眞や、地形圖のみでなくて、非常に手數のかゝつた、工夫されたカットから出來てゐるのを見ると、凡そかうした挿圖のみについて、幾百人の勞力を煩はしてゐるか窺ひしりえないのであつて、我等はその明確にして器用な著者の編輯振りに對して自ら頭